

西洋古典資料をもっと知るために

製本家・書籍修復家
岡本幸治

西洋古典資料は現代の本とは異なる点を多く持っている。印刷に用いられる紙は、麻(主として亜麻)のボロ(古着)を原料にした手漉き紙である。手漉き紙には様々な大きさの紙があり、印刷をした紙を折って折丁を形づくる。紙の方向を変えながら折り畳むことによって2紙葉のフォリオ判、4紙葉のクォート判、8紙葉のオクタボ判などの折丁になる。印刷は鑄造活字の組版による活版印刷であり、印刷の終えた折丁の組版を解いて残りのテキストを印刷する。印刷が終わるまでに紙が替わる場合もある。校正や検閲などにより印刷が修正されてページが差し替えられる場合もある。印刷・出版と製本は別々に行われることが普通であって、出版時には仮とじの状態で開催され、所蔵者がそれぞれ製本を依頼する。本は製本されて本になる。同じ出版物であっても異なった製本になる。そのため西洋古版本には、所蔵の履歴が色濃く形態に反映されることになる。タイトルが同じでも同一の版とは限らず、同一の版であっても製本などの形態が異なる。出版された当時の姿のまま(仮とじ本)で今日まで伝わっている場合もある。安価で簡略な製本を施されて余白を大きく断裁されることもあれば、豪華で華麗な製本が施されてページの余白がたっぷりと保持される場合もある。製本が傷んで修復されたり、製本し直されたりする場合(再製本)もある。製本依頼時にメモのための白紙を付け加えたり、見返しなどに蔵書票を貼り付けたり、本紙にメモやアンダーラインをインクや鉛筆などで書き込む場合もある。製本工房や古書店がシールを張ったりスタンプを押す場合もある。西洋古典資料には形態の履歴がある。製本の仕様は一様ではなく、製本構造や装飾様式、使用される材料の性質も多種多様である。

西洋古典資料の保存はこのような多様性を持った本を対象として取り組むことになる。どのような特徴を持った本がどのくらいあるのか、傷んでいる本がどれだけあってどんな傷み方をしているのかが具体的に分かると保存手段を考えやすくなる。これからも傷む可能性のある本を抽出することができて、研究価値、資料価値、稀少性などに加えて利用頻度、劣化の度合い、処置の緊急性などを勘案して保存手当ての優先度を決めることが出来ると、保存への体系的な取り組みが可能になる。このような情報を効率よく記録して分析するための手段が調査票である。

西洋古典資料の何を調査すればよいのだろうか。資料を保存する、いつでも利用できる状態に管理しておくために必要な情報が得られることが大切である。それはモノとしての本の詳細なデータであり、具体的には、製本の構造、使用されている材料、構造と材料の性状と劣化状況である。それらの項目について考察する。